



「怒る」と「叱る」こと ～いつのまにか体罰を防ぐために～

「怒る」と「叱る」の違いっていったい何だろう…

この2つは「いつの間にか体罰」になることもあります。

今回は「怒る」と「叱る」の違いについて考えます。

「怒る」と「叱る」の違いとは

「怒る」と「叱る」は違うとよく言われていますが、言葉の意味はそれぞれ次のようになります。

◆「怒る」：自分の感情を相手にぶつけること ◆「叱る」：相手に対して助言・アドバイスをすること
要は、自分の感情が入っているかどうかの違いらしいです。「怒る」は、自分のイライラなどの負の感情が入っているためよくないとされ、「叱る」は、冷静に相手を良い方向に導いていくことで大切とされています。

正しく「叱る」ことができますか？

ところで、みなさんは正しく「叱る」ことができますか？冷静に良い方向に導くことができますか？

この問いに、私は、正直自信がありません。きっと叱るときには、きつい口調でマイナスなワードを使い子どもを責める、「叱る」という名の「怒る」になってしまう気がします。なので、私は「叱る」という手段を極力使いません。叱るときは「児童が命に関わる危険な行為をしたとき」と「誰かの心身を一方的に傷つけたとき」と決めています。

「叱る」ときはどんな時？

「叱ってしまった」ときを振り返ってみてください。きっと、その子の言動で、「授業や活動が思う通りに進まなかった時」や「予想外の言動をされたとき」が多いのではないのでしょうか？しかし、それは、「自分の想定や考えの不十分さ」と「指導の手立てやバリエーションの不足」で起きたことと捉えなければいけません。子どもたちに「それはいけません」と叱る前に、自分自身の指導を見つめなおす必要があるはずです。

「叱ってしまった…」ときには

それでも、思い余って叱ってしまうこともあります。その時は必ず、「叱る以外にどういう手立てで指導すればよかったのか」と自身の指導力不足を反省するとともに、叱った以上に良いところを見つけ「褒めて」あげてください。そのことで、叱ったことが無くなる訳ではありませんが、自分自身のこれからの指導と子どもたちの心を癒す「回復の種」にはなるのではないかと思います。

子どもの心は繊細であり、叱ることや厳しい指導を受けると、主体性や自己肯定感の喪失や攻撃的行動が増強することが明らかになっています。ぜひ、叱らない指導を心がけてください。

まとめ

「叱る指導」は劇薬と同じです。即効性はあるがすぐに効かなくなり、徐々に強い指導となり、最後には子どもの心を壊していく。その末路として「不適切な指導」や「体罰」へ身を投じさせてしまうことになります。

「令和の日本型学校教育」は、子どもの主体性を大切にした教育であり、「させる指導」ではないはずです。まじめで正義感の強い教師ほど「教えるのが教師」と思いがちですが、「教える」前に、考えや手立てがその子の主体性を引き出すかどうか、自分に問い直してから指導してほしいと思います。